

変化するシーザーのイメージ：シーザー論

蛸原，啓

<https://doi.org/10.15017/2332758>

出版情報：文學研究. 70, pp.13-29, 1973-03-25. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

変化するシーザーのイメージ

— シーザー論 —

蛭原啓

『ジュリアス・シーザー』は言葉や文体が比較的単純であるために、シェイクスピアの作品の中で我々にとって最も近づき易い作品となっている。しかし、一見単純に見えるこの作品も、何回か読むうちに、内容的には色々と問題を含んでいて、むしろかなり複雑な劇であることが判明する。事実、シーザーやブルータスに対する評価は、学者の間でもなかなか一致をみないのが現状である。小論の目的は、特にシーザーに焦点をしぼり、シェイクスピアが描こうとしたシーザー像はどのようなものであったか、を検討することにある。

幕が開くと、二人の護民官がお祭り気分の市民たちに当り散らしている。シーザーに反感をもつ不満分子のレイヴィアスとマララスである。彼らは、街にたてられているシーザーの像から飾りつけを取りはずしてしまうつもりでいる。なぜなら、

These growing feathers pluck'd from Caesar's wing
Will make him fly an ordinary pitch,
Who else would soar above the view of men
And keep us all in servile fearfulness. (I. i.72—5)¹

だからである。ここでレイヴィアスが使っているメタファは、いうまでもなく、鷹狩りから来たもので、彼らが今からやろうとしていることは、シーザーから権力の一部を奪い取る象徴的な行為である。彼らがシーザーに対して今やれることは、精々その程度のことではかないのである。このレイヴィアスの言葉の中に、既に超人的なシーザーのイメージが現われ

(注1) 作品からの引用は T.S. Dorsch 編アーデン版による。

ている。

しかし、これだけの描写で、このシーザーのイメージが実際に観客にどれだけ強い印象を与えるか疑問である。観客はシーザーが実際に舞台上に現われるのを待つだろう。そして、フレイヴィアスの描写が正しいものであるかどうかを確かめたいと思うに違いない。ところが、第二場で登場するシーザーはフレイヴィアスの描写を裏書きするようなシーザーではない。確かに、ラッパが吹奏され、伴を従えて登場するシーザーの姿は、シェイクスピアの他の劇に出てくる王の姿と変わらない。威厳をもって堂々と登場するように意図されている。しかも、「閣下が『こうせよ』と仰せられれば、なされたも同然でございます。」(“When Caesar says, ‘Do this,’ it is perform’d.”) (I .ii.10) とアントニーがいう時、シーザーのもつ絶大な力が暗示されている。しかし、それ以外の点では、シーザーが特に《暴君》であるとか、《超人的な demi-god》であるという印象は受けにくい。むしろ、我々が見るのは、妻の不妊症を気にしてどうにかならぬかと願っている、いわば、ごく普通の人間である。また、彼が「三月十五日にご用心」(“Beware the ides of March.”) (I .ii.23) という予言者の言葉を問題にしなかったとしても、その態度が尊大であるということにはならない。

シーザーとその一行が去り、ブルータスとキャシヤスが残ると、再びシーザーのイメージは超人的なものに変化していく。即ち、キャシヤスのみ見るシーザー像である。キャシヤスにとって、シーザーは既に「神のようなシーザー」(“immortal Caesar”) (I .ii.59) となっており、人々は「現在の圧制にうめいている」(“groaning underneath this age’s yoke”)

(I .ii.60) のである。もちろん、キャシヤスは過去のシーザーを徹底的に矮小化し、滑稽化する。シーザーに対する憎しみから彼を徹底的に軽蔑する。しかし、キャシヤスが指摘しているシーザーの弱点が、果してみな弱点といえるかどうか疑問である。タイバー川渡泳を自ら挑戦しながら、途中でへたばったことは、シーザーにとって情けない失敗だったとしても、発熱し、発作を起した人間が身を震わせ、蒼白になり、飲物を所望するのは、冷静に考えてみれば、極めて当然であって、これでもってシーザーが「こんな意気地のない男」(“A man of such a feeble temper”) (I .ii.128) だという証拠にはならない。もちろん、キャシヤスがブル

ータスにいいたいことは、肉体的に自分よりも劣った《虚弱なシーザー》が今や《神》の如く自分たちを支配している、ということである。それが癩にさわって仕方がない。

Why, man, he doth bestride the narrow world
Like a Colossus, and we petty men
Walk under his huge legs, and peep about
To find ourselves dishonourable graves. (I .ii.133—36)

これがキャシヤスがブルータスに印象づけようとしているシーザーのイメージであり、自分たちのみじめな姿である。我々は再びここに超人的になったシーザーをみるのである。《虚弱なシーザー》から《コロッサスの如きシーザー》への飛躍的变化である。もちろん、両者の差の激しさは、ブルータスに強く印象づけるためにキャシヤスが意図したものに外ならない。

シーザーが伴をつれて再び登場すると、キャシヤスについて鋭い洞察を示す。彼はキャシヤスが危険人物であること気づいている。従って、キャシヤスを意識し、恐れていることは明白である。にも拘わらず、自分が恐れているということは決して認めようとしなない。シーザーという名前と恐怖感とは全く相容れないものだ、と自負しているからである。

...I fear him not:

Yet if my name were liable to fear,
I do not know the man I should avoid
So soon as that spare Cassius....
I rather tell thee what is to befear'd
Than what I fear; for always I am Caesar.

(I .ii.195—98;208—9)

つまり、シーザーは自分自身のシーザー像を作りあげるのに懸命である。威厳があり、恐怖を知らぬシーザー像がそれである。だから、内心恐怖感を抱く時、それを懸命に打ち消そうとする。そこに演戯が必要となり、無

理が生じることになる。事実、シーザーは絶えず自らの役柄を演じているといっても過言ではない。

しかし、シェイクスピアは、このようなシーザーを作りながら、そのすぐ後でシーザーの片耳が不自由なことに言及するのである。これはシーザー自身が述べているのであるから、そのまま信じないわけにはいかない。プルタークにもないこの肉体的欠陥を、作者はなぜわざわざシーザーに与えたのであろうか。また、こともあろうに公衆の面前で、しかも最も不都合な場面で、シーザーに癲癇の発作を起させた作者の意図は何であろうか。これは、恐らく、この劇に一貫して流れている《シーザーの肉体》と《シーザーの精神》の二重性デュアリズムに関係があるものと思われる。既にみたように、キャシスはシーザーが肉体的に虚弱であるにも拘わらず、今や神のような存在となって、絶大な権力をもつに至ったことを強調してきた。もちろん、憎しみを露にしたキャシスの言葉をそのまま作者の意図するシーザー像と解することは出来ないが、キャシス一流のレトリックは《虚弱なシーザー》と《コロッサスの如きシーザー》の二つのシーザーのイメージを我々に印象づけずにはおかないだろう。それに加えて、シーザー自身が片耳が悪いことにふれ、癲癇の発作を起し、泡を吹いて気絶したことがキャスカによって知らされると、《虚弱なシーザー》像が更に作者によって裏書きされることになる。たとえキャスカが皮肉を込めて報告したとしても、事件の骨子だけは信じてよいからである。とすれば、やはり作者も、キャシスと同じように、《虚弱なシーザー》像を作っていることになる。つまり、一方において、《虚弱なシーザー》のイメージがシーザーの肉体が減びるまで我々から離れることはない。

ところが他方において、《コロッサスの如きシーザー》が存在することもまた紛れも無い事実である。これは《シーザーの精神》が代表するものであって、劇が終るまで減びることはない。キャシスが誇張して描き、シーザー自身が自ら演じようとしているシーザー像である。このように我々は、この劇の中で二つのシーザー像を同時に意識するのである²。

もちろん、キャシスの描くシーザー像は、偏見をもった人間のだけ大きな表現であることを忘れてはならない。雷が鳴り、稲妻が光る異常な夜

(注2) Wilson Knight, "The Eroticism of Julius Caesar" in *The Imperial Theme* (London: Methuen, 1965), pp. 64—66.

は、キャシヤスにとって、シーザーの暴政を反映したものに外ならない。つまり、シーザーは「雷を鳴らし、稲妻を光らせ、墓を開き、ライオンのようにほえる、この恐しい夜のような男」 (“a man/ Most like this dreadful night, / That thunders, lightens, opens graves, and roars/ As doth the lion...”) (I .iii.72—5) であり、更に、

A man no mightier than thyself or me
In personal action, yet prodigious grown
And fearful, as these strange eruptions are. (I .iii.76—8)

である。ここにも《虚弱なシーザー》と《コロッサスの如きシーザー》のダブル・イメージがある。キャシヤスにとって、シーザーは「暴君」 (“tyrant”) (I .iii.103) で、自分たちローマ人は「くびき」 (“yoke”) (I .iii.84) につながれ、苦しんでいる奴隷である。つまり、シーザーはローマ人の自由を奪っている暴君である。しかし、これはあくまでキャシヤスの考えるシーザーであって、これをそのまま作者の声として解すべきではない。従って、John Palmer がシーザーは既に “a full-blown tyrant”³ だとしているのは大いに疑問である。我々がテキストを読む限り、シーザーが暴君であることを示す証拠は存在しない。また、もしシーザーが既に暴君であることがはっきりすれば、シーザーを殺害しても少しも差支えないことになるし、ブルータスが何のために悩むのかまるでわからなくなってしまう。ブルータスが悩んでいるのは、シーザーはキャシヤスがいうような暴君ではないからに外ならない。共謀者たちの中で、ただ一人ブルータスだけが異なった考えをもっている。第二幕第一場の彼の独白は、論理の飛躍を別にすれば、作者の考えたシーザーを暗示しているものと思われる。

周知の如く、独白はある登場人物が自分の本心を吐露する伝統的な手段であり、更にそれがある程度観客へ客観的な情報を提供する手段でもあった。この独白で明らかのように、ブルータスはシーザーに何ら敵意をもっていない。ただ共和国のことを思えばこそ、シーザーを殺さざるをえな

(注3) *Political Characters of Shakespeare* (London : Macmillan, 1961), p. 7.

い、と結論づけているのである。その理由は、シーザーが「王になりたい」(“He would be crown’d”) (Ⅱ.i.12)と望んでおり、王にならなければ、彼の性格が変わるかもしれないからである。共和制を信奉するブルータスにとって、これは許し難いことである。特に「高い地位について腐敗すると、権力のみをふるって憐みの心を失ってしまう」(“Th’ abuse of greatness is when it disjoins / Remorse from power.”) (Ⅱ.i.18—19)からである。しかし、ブルータスが、

...to speak truth of Caesar,
I have not known when his affections sway’d
More than his reason. (Ⅱ.i.19—21)

とはっきり告白していることは極めて重要である⁴。これはシーザーが少なくとも今のところ暴君ではない、という指摘に外ならない。ただブルータスは、ローマの将来を案じるが故に、「かもしれない」という論法で結論を急いでしまうのである。

ブルータスが独白で言及しているシーザーは、《今のところ暴君とはいえないが、将来そうなるかもしれないシーザー》である。事実、テキストの中にシーザーが暴君であるという証拠は存在しないことは既に述べた通りである。王冠への野心についても、プルタークでは、

But the chiefest cause that made him mortally hated was the covetous desire he had to be called king; which first gave the people just cause, and next his secret enemies honest colour, to bear him ill will.⁵

(注4) A.M. Wilkinson は、これをブルータスの無知のせいにして、果してシーザーはそうだろうか、と問うている。シーザーの“lowliness”や迷信的なことは彼の“reason”の“deterioration”だと指摘しているが、この意見には賛成出来ない。そのように解するならば、この独白はまるで意味を失ってしまう。ブルータスのこの言葉はそのまま受取るべきである。“A Psychological Approach to *Julius Caesar*”, *A Review of English Literature*, VII (1966), 72. を参照せよ。

(注5) T.J.B. Spencer (ed.), *Shakespeare’s Plutarch* (London: Penguin Books, 1964), pp. 80—81. 以下*Plutarch*と略す。

と断定的に述べられ、更にアントニーがシーザーに王冠を与えようとした時、王冠で民衆がどのような反応を示すか試そうとしていることがわかる。王冠をシーザーにかぶせるごとに、群衆の中の《さくら》(“a few appointed for the purpose”)が歓声をあげるのである⁶。シェイクスピアにはこのようなトリックは感じられないし、シーザーの王への野心も、プルタークに較べれば、かなり弱められているように思われる。また、マララスとフレイヴィアスの処分についても、プルタークには、シーザーの像から“scarfs”を取り除いたことでシーザーが激怒し、彼らから護民官の職を奪った⁷、とあるが、シェイクスピアには「謹慎させられた」(I.ii.283)と伝えられるだけである。このように、我々はシェイクスピアのシーザーがより寛大であることを知るのである。

シーザーが癩癩もちであることはプルタークによるものであるが、片耳を不自由にしたのはシェイクスピアの創意である。作者の意図は、キャシウスがいうような《神》になったシーザーを作るためではなく、むしろそれだけ不完全な人間としてのシーザーを描くことにあったに違いない。しかし、ここで注意すべきことは、シーザーの弱点のみを拾いあげて彼を矮小化し、滑稽化してはならないことである。年老いた、肉体的欠陥をもつ《虚弱なシーザー》が一方にあったとしても、これは決してシーザーの矮小化、滑稽化ではない。

また、シーザーに《高慢さ》を与えたのは何もシェイクスピアの専売特許ではない。シェイクスピア時代及びそれ以後のシーザー像の伝統はシーザーに高慢な性格を与えており、シェイクスピアもその伝統に従って“a touch of grandiosity”を彼に与え、シーザー描写を説得力のあるものにしようと努めたのである⁸。ただ、シェイクスピアのシーザーはその名に恥じない言動をせんとし、自分以上のシーザーを演じようとしていることは既にふれた通りである。

このことは第二幕第二場でもっと明らかになる。雷や稲妻を伴った異常な天候が朝になっても続いている。それだけでも異常なのに、カルパー

(注6) *Ibid.*, p. 83.

(注7) *Ibid.*, p. 84.

(注8) H.M. Ayres, “Shakespeare’s *Julius Caesar* in the Light of Some Other Versions,” *PMLA*, xxv (1910), 226.

ニアが「助けて！ シーザーが殺される！」（“Help, ho! they murder Caesar!”）（Ⅱ.ii.3）と寝言で叫んだのである。だから、シーザーも心配になり、卜占官（“augur”）の意見を聞きにやらせる。もちろん、これでもってシーザーが特に迷信的だということにはならない。作者は明らかにこの異常な天候をシーザー暗殺の前兆として使っているからである。つまり、この嵐は、カルパーニアの正夢、犠牲による占いと共に、はっきりとシーザーに警告を発しているのである。因に、プルタークには、はっきりと、これらは暗殺計画に関する神の警告とある⁹。もちろん、シセローが述べているように、「人間は物事を自分勝手に解釈して、物事本来の目的とはまるで違った解釈をする」（“men may construe things after their fashion,/Clean from the purpose of the things themselves.”）（Ⅰ.iii.34—35）のものであり、キャシヤスがこれをシーザーの暴政の反映と解したことは前述の通りである。しかし、そのキャシヤスがまた別の解釈も行ない、この異常現象が自分たちの共謀を反映しているともいっているのである（Ⅰ.iii.128—30）。このように解釈には差が生じようとも、とにかく異常な自然現象が何か重大な事件の前兆として用いられることは当時の伝統的な手段であった。特にカルパーニアが述べているように、「王侯の死には天までが焰を放って知らせるのです。」（“The heavens themselves blazes forth the death of princes.”）（Ⅱ.ii.31）という考えは一般的なものであり、この劇においてもまさにその通りになるのであるから、特に迷信的という必要はない。

カルパーニアの気遣いにも拘わらず、シーザーは自らの名前のもつ力に自信をもち、元老院へ赴こうとしている。

Caesar shall forth. The things that threaten'd me
 Ne'er look'd but on my back; when they shall see
 The face of Caesar, they are vanished. (Ⅱ.ii.10—12)

そうかと思うと、一方では、何か運命の如きものの訪ずれに感づいているようでもある。

(注9) *Plutarch*, p. 115.

What can be avoided
Whose end is purposed by the mighty gods?
Yet Casar shall go forth; for these predictions
Are to the world in general as to Caesar....
Cowards die many times before their deaths;
The valiant never taste of death but once.
Of all the wonders that I yet have heard,
It seems to me most strange that men should fear;
Seeing that death, a necessary end,
Will come when it will come. (II.ii.26-9;32-7)

気になっていたト占官からの報告は、シーザーに外出せぬようにとの警告であった。しかし、シーザーは自ら求めたト占官の予言には従おうとはしない。恐怖のために家にとどまるなどとは臆病者のすることだからである。何か不吉な前兆に気づいていながら、決して恐れている様子を見せたくないシーザーの姿がそこにあるようである。それは次のような誇大な言葉となって現われる。

...danger knows full well
That Caesar is more dangerous than he.
We are two lions litter'd in one day,
And I the elder and more terrible,
And Caesar shall go forth. (II.ii.44-8)

自らを準えているりりしいライオンの姿こそ、シーザーがその名に恥じないように演じようとしている《シーザー像》に外ならない。それは《危険》よりももっと危険で、恐ろしいシーザーである。従って、自分が恐れている様子を見せることは出来ない。もし家にとどまるならば、それはカルパーニアのため(“for thy humour”)であって、自分が恐れているためではない。シーザーとしてはそこを明確にしておく必要があるわけである。

シーザーとカルパーニアとの会話は、ブルータスとポーシャとの会話と好対照をなしている。ブルータスは妻のポーシャを自分と対等な人間とし

て取扱っているのに対して、シーザーは妻を自分より低い存在として扱っている。夫婦の間での会話でありながら、シーザーは妻に話しかけるといふよりは、大勢の人々に向けて演説をしているようである。例えば、Ⅱ. ii. 32—37 や 41—48 などはそのよい例であろう。つまり、シーザーは常に自らを演じているわけで、家庭内での妻との会話の中ですら、自分を三人称で呼び、すぐ演説口調になってしまうのである。しかも、シーザーともあろうものが嘘をつくようなことがあってはならない、と思っている。これもシーザーの強調したいことである。従って、ディーシャスがシーザーを迎えに来た時、シーザーは「行けない、のではない。また、行くのを恐れるのでは尚更ない。ただ今日は行かぬ。」（“Cannot, is false; and that I dare not, falsar;/I will not come to-day.”）（Ⅱ. ii. 63—64）と述べ、カルパーニアが「病気だといって下さい」（“Say he is sick.”）（Ⅱ. ii. 65）とディーシャスに言えば、シーザーは、

Shall Caesar send a lie?

Have I in conquest stretch'd mine arm so far,

To be afeard to tell graybeards the truth?...

...I will not come;

That is enough to satisfy the senate. (Ⅱ. ii. 65—7; 71—2)

といて、自分の *integrity* を強調するあまり、逆に態度が横柄になり、元老院議員に対する軽蔑をまるだしにしてしまう。シーザーの好ましくない一面である。作者はこの辺からシーザーを次第に我々から遠ざけようとしているのであろうか。このシーンにおけるシーザーは、虚勢を張ったり、恐れを知らぬ自分のイメージを作るのに懸命になったりしているように思われる。事実、シーザーは“fear”とか“afraid”という言葉を極度に嫌う。その証拠に、ディーシャスに「ほら、シーザーは恐しいのか」（“Lo, Caesar is afraid?”）（Ⅱ. ii. 101）といわれた瞬間、シーザーはカルパーニアの賢明な忠告を無視して、自宅にとどまる決意を翻してしまう。ディーシャスは見事にシーザーの急所を掴んだのである。

元老院へ行く途中、予言者に向って「三月十五日が来たではないか」（“The ides of March are come.”）（Ⅲ. i. 1）とシーザーがいう時、

彼の態度は挑戦的である。それでも何も起らぬではないか——という気持が込められていることはいうまでもない。ここはプルタークに忠実であるが、次のアーテミドラスが手紙を手渡そうとして、シーザーが「わしの一身に関することはあとまわした」(“What touches us ourself shall be last served.”) (Ⅲ.i.8) と答える部分は素材とかなり違っている。プルタークは次のように書いている。

Caesar took it of him, but could not read it, though he many times attempted it, for the number of people that did salute him; but holding it still in his hand, keeping it to himself, went on withall into the Senata-house.¹⁰

シェイクスピアはこの変更によって、シーザーの寛大さ (magnanimity) を示そうとしたのであろう。この度量の大きいシーザーこそシーザーの考える自分のイメージなのである。

権力の座にあるものはお世辞に弱いものである。シーザーとて例外ではない。このことは既にディーシャスが証明している。もちろん、シーザー本人は自分がへつらいなどに左右される人間ではないと思っており、特に公衆の面前ではそのことをはっきりさせなければならない。このシーザーの気持をうまく利用して、共謀者たちは最大限のへつらいをシーザーに向ける。メテラス・シンバーが膝をついて、

Most high, most mighty, and most puissant Caesar,
Metellus Cimber throws before thy seat
An humble heart, (Ⅲ.i.33—5)

と言い始めると、シーザーは予想通りそれを遮り、一席ぶつことになる。

I must prevent thee, Cimber.
These couchings and these lowly courtesies
Might fire the blood of ordinary men,

(注10) *Plutarch*, p. 91.

And turn pre-ordnance and first decree
Into the law of children. Be not fond,
To think that Caesar bears such rebel blood
That will be thaw'd from the true quality
With that which melteth fools—I mean sweet words,
Low-crooked courtesies, and base spanial fawning.
Thy brother by decree is banished:
If thou dost bend and pray and fawn for him,
I spurn thee like a cur out of my way.
Know, Caesar doth not wrong, nor without cause
Will he be satisfied. (Ⅲ .i.35—48)

さすがにブルータスは見え透いたへつらいはしない。しかし、次にキャシヤスが故意に頭を低くしてパブリウス・シンバーの釈放を願い出ると、シーザーはますます頑固になり、まさに《コロッサスの如きシーザー》を演じるのである。

I could be well mov'd, if I were as you;
If I could pray to move, prayers would move me;
But I am constant as the northern star,
Of whose true-fix'd and resting quality
There is no fellow in the firmament.
The skies are painted with unnumber'd sparks,
They are all fire, and every one doth shine;
But there's but one in all doth hold his place.
So in the world: 'tis furnish'd well with men,
And men are flesh and blood, and apprehensive;
Yet in the number I do know but one
That unassailable holds on his rank,
Unshak'd of motion; and that I am he,
Let me a little show it, even in this,
That I was constant Cimber should be banish'd,

And constant do remain to keep him so. (Ⅲ.i.58—73)

自らの意志堅固な態度を北極星に準えたこの演説には、その朝元老院へ行くべきかどうかためらっていたことを考えれば皮肉が感じられるし、批評家のよく指摘する、いわゆるシーザーの《thrasonical brag》が極端な形で現われている。しかも作者はシーザーに「さがれ！貴様はオリンパスの山を持ち上げるといふのか」(“Hence! Wilt thou lift up Olympus?”) (Ⅲ.i.74) といわせ、シーザーの高慢さを殆んど限度にまでもってきて、そしてその時点でシーザーを暗殺させている。つまり、シーザーが最も不愉快な面を観客に示している時に暗殺が行われるのである。名前こそ王ではないけれども、一国を支配する統治者が殺される場面は、エリザベス朝人にとってやはり大きな衝撃であったに違いない。そこでシェクスピアは暗殺の直前に観客の感情をシーザーから遠ざけようとしているのである。だから、シーザーの死によって観客が特に同情の念をかきたてられるということはないのではないだろうか¹¹。

シーザー暗殺によってシーザーの肉体は滅びてしまう。片耳の不自由な、癩癩もちの《虚弱なシーザー》はここで完全に姿を消してしまうのである。また、シーザーが最後まで演じ通してきた《コロッサスの如きシーザー》或いは《オリンパスの如きシーザー》も、その肉体面に関する限り、ここで姿を消してしまう。残るは、ただ、歴史上のシーザーである。アントニーの、

O mighty Casar! dost thou lie so low?
Are all thy conquests, glories, triumphs, spoils,
Shrunk to this little measure? (Ⅲ.i.148—50)

という亡骸への呼びかけは、歴史上のシーザーという偉大な人物についての客観的な感じ方ではないだろうか。横たわっている遺体をみる限り、「多くの王侯たちにうたれた鹿」(“a deer stricken by many princes”) (Ⅲ.i.209) の如きものである。しかし、アントニーが評しているよう

(注11) Ernest Schanzer, *The Problem Plays of Shakespeare* (London: Routledge, 1965), p. 66.

に、「あなたは、移りゆくこの世に生をうけた最も高貴な人の廃墟だ」
（“Thou art the ruins of the noblest man / That ever lived in the
tide of times”）（Ⅲ.i.256—7）という言葉は、決してアントニーの鼻屑
目ではなく、むしろ客観的なシーザー評といえるであろう。欠点はもって
いたにしても、高潔な人間であったことには違いないからである。このよ
うな支配者を失えば、

Domestic fury and fierce civil strife

Shall cumber all the parts of Italy. (Ⅲ.i.263—64)

という考えは、エリザベス朝にごくありふれた考え方であった。王位にこ
そついていないが、シーザーは王の如き存在であり、かかる人物の死は当
然覇権をめぐる内乱の恐れがあったのである。もちろん、アントニーの
この予言は的中することになる。

アントニーが独白の中で“Caesar's spirit”（Ⅲ.i.270）にふれている
点は特に注目値する。なぜなら、ブルータスが共謀においてたち向わん
としたものは“the spirit of Caesar”（Ⅱ.i.167）だったからである。も
ちろん、spiritの意味が、前者では「亡霊」であり、後者では「精神」と
違ってはいるが、同じ言葉を用いていることからして作者が両者の融合を
計っていることはいうまでもなからう。事実、シーザーは肉体が滅びた
後、彼の spirit がこの劇の後半を支配することになるからである。ブル
ータスが目差したものがシーザーの spirit であったにも拘わらず、実際
に滅ぼしたのは彼の肉体にすぎなかったところに最大のアイローがあっ
た。《コロッサスの如きシーザー》の別な一面——つまり、精神面はその
まま生き残り、ついにはブルータスたちを死へ追いやってしまうことにな
るからである。

シーザー暗殺に対する市民の反応は、まずブルータスの演説によって暗
殺者たちに有利な方向へむかうが、アントニーの巧みな扇動に乗せられて
豹変する。プルタークによれば、市民たちの反応はアンビヴァレントなも
のであった。彼らはシーザー暗殺を非難もしなかったが、それかといって
認めもしなかった。ただ沈黙を守ってシーザーの死を気毒に思い、ブルー

タスには敬意を表した、と書かれている¹²。市民たちが騒ぎ、收拾できなくなったのは、シーザーの寛大な遺書をみてからである。その際プルタークはアントニーのことには全然ふれていない¹³。シェイクスピアは、アントニーを最大限に活用することによって、この場面をこの劇最大の山場とした。ブルータスとアントニーを対照的に描き、民衆の移り気を巧みに織り込むことによって、遺体となって横たわっているシーザーが、今度は遺書によって民衆に強く働きかける有様を絶妙な筆致で描き出している。シーザーの市民たちに対する寛大さは、暗殺直前の不遜なシーザーに対する観客の感情を和らげる効果をもっている。つまりシェイクスピアは、暗殺の瞬間に至るまでシーザーを観客から遠のけるように周到に準備しながら、一旦シーザーが倒れると、またシーザーに観客の感情を近づけようとしているように思われる。そうすることによって、シェイクスピアはブルータスの過ちを別な面から暗示しているように思われる。

シーザーの遺体の果す役割も注目すべきである。彼が殺害された瞬間(Ⅲ.i.77)からアントニーが遺体をひとまず運び去る(Ⅲ.i.297)までシーザーの血まみれの遺体は舞台の上に横たわっている。第三幕第二場でブルータスの演説の途中で再びシーザーの遺体が運び込まれ(Ⅲ.ii.42.s.d.)、火葬のために市民たちがその遺体を運び去る(Ⅲ.ii.261.s.d.)まで舞台の上に安置され、劇はその遺体を中心に進んでゆくのである。つまり、481行のうちシーザーの遺体が舞台上にみえないのは、ブルータス演説を含むわずか44行の間にすぎない。従って、シーザーは死体になっても顕著な姿を殆んど引き続いて観客にみせており、それが観客に対して感情的に働きかけ、アントニーの扇動と相俟って生きているのと殆んど同じくらい力をもつのである。そして、遺体が舞台から消えると、今度はいよいよシーザーの *spirit* が劇を支配することになる。

(注12) *Plutarch*, p. 97.

(注13) 以上は「シーザー伝」によったが、「ブルータス伝」では、市民たちはブルータスの演説を静かに聴いていたが、シーザー殺害に不満を示し、次にシナが演説しようとしたら民衆が騒ぎだし、暗殺者たちは再びキャピトルの中へは入っている。また、元老院がシーザーの遺書について話し合った際、アントニーがこれを民衆の前で読むべきだと主張し、キャシヤスが反対したにも拘わらず、ブルータスはこれに同意している。シェイクスピアはこれからヒントを得たのであろう。

Plutarch, pp. 126—7参照。

内乱が勃発し、キャシャスの提案を退け、ブルータスが敵軍をフィリッパイで討つ決心をしたのは、ある意味では、シーザーの spirit の影響といえなくもない。というのは、後にサーディスでシーザーの亡霊が現われ、ブルータスにフィリッパイでの再会を約束しているからである。もちろん、この作戦は暗殺者たちを破滅へ導くものに外ならない。プルタークによれば、ブルータスの前に現われた亡霊（シーザーの亡霊とは書いてない）は、神々のシーザー殺害に対する怒りを示したものであるが¹⁴、シェイクスピアの場合、その点はむしろ曖昧である。確かに、復讐を求める亡霊の一種に違ひなからうが、実際はそれほど強いものではなく、むしろシーザーの spirit の現われを亡霊で象徴したものと解すべきであろう。つまり、シーザーは、いわば、まだ生きているのである。事実、キャシャスは亡霊について何も知らないにも拘わらず、「シーザー、貴様の仇はうてたぞ、しかも貴様を殺したまさにその剣でな。」（“Caesar, thou art reveng’d, / Even with the sword that kill’d thee.”）（V.iii.45—6）と叫びながら死んでいく。キャシャスの死を知ったブルータスは、

O Julius Caesar, thou art mighty yet!
Thy spirit walks abroad, and turns our swords
Into our own proper entrails. (V.iii.94—6)

とあって、シーザーが肉体は滅びても依然として見えざる力で彼らを操っている、と解しているし、シーザーの亡霊が二回にわたって現われたことで、自分の運も尽きたものと判断し、自殺を遂げる。彼もまたキャシャスと同じように、「シーザー、これでお前も成仏しろ。お前を殺した時、今ほど進んで殺しはしなかった。」（“Caesar, now be still; / I kill’d not thee with half so good a will.”）（V.v.50—51）とシーザーを最後まで意識しながら死んでいく。

以上、私は、シーザーのイメージが劇の中でどのように変化するか、ということについて論じてきた。まず我々は、キャシャスの巧みなレトリックによって、《虚弱なシーザー》と《コロッサスの如きシーザー》とい

(注14) *Plutarch*, p. 99.

う、一見相反する二つのイメージに印象づけられた。もちろん、キャシャスの主張する《コロッサスの如きシーザー》はまさしく暴君ということに外ならない。しかし、シェイクスピアはこの二つのイメージを作りながら、ブルータスの独白によって、シーザーが暴君にはなっていないことを暗示している。即ち、ブルータスのみるシーザーは《今のところ暴君とはいえないが、将来そうなるかもしれないシーザー》である。これは疑いもなく作者の意図するシーザーである。シーザー自身は、一方では肉体的な欠陥によって《虚弱なシーザー》であることを示してはいるものの、他方自らの高貴で、恐れを知らぬ、意志堅固な《オリンパスの如きシーザー》像をもって、それに恥じないように言動しようとするあまり、常に演戯の必要性にせまられているのである。それが極端になると、自分の妻にまで自分を演じなければならなくなってしまう。しかし、シーザーが暗殺されると、《虚弱なシーザー》も《コロッサス（オリンパス）の如きシーザー》も消え去り、アントニーの評価する《歴史上のシーザー》が残るのである。

これを単純化すれば、作者は《弱いシーザー》と《強いシーザー》の二つのイメージを同時に作りだした。これは作者が人間を決して一面的に描かず、長所があれば短所もある全人的な人間として描くことに努めているからだと思われる。《良い人間》と《悪い人間》とは、結局、一人の人間の中で《良い性質》と《悪い性質》のどちらが大きな割合を占めるか、ということに外ならない。人間は全く白ということもありえないし、全く黒ということもありえない。従って、そのように色分けすること自体全く無駄なことである。シェイクスピアは人間性の複雑さを極めてよく理解していたのである。